

待降節第1主日

福音朗読 マタイ 24・37-44

2022.11.27

カトリック高円寺教会

主任司祭 高木健次神父

今日から新しい典礼の言葉でごミサをお捧げしています。最初慣れないうちはプリントを見ながらしなければいけないので、少し面倒かなあとと思うかもしれませんが、しかし、改めて、わたしたちがごミサを捧げることができる、それは恵みのうちにあるのだということを思い起こす機会にもしたいと思います。

考えてみてください。迫害時代の信者たちはミサを捧げたくて捧げられない、その人たちは、今いるならば、「どんな言葉でもミサが捧げられるならば喜んで捧げます」と言うに違いありません。わたしたちは、ミサを捧げることができなかったという信仰の先輩の分までもつとめを果たす、その思いを新たにして、ある意味では司教さんたちとともにどんな言葉がふさわしいのか試行錯誤しながら、ミサができるということとそのものが恵みなんだということを思い起こしたいと思います。

さて、今日から待降節になりました。待降節はもちろんクリスマスを準備する期間でありますけれども、と同時に、今日の福音の朗読が示しているように、やがてイエス様が、救い主が再びこの世に来られてすべてが完成される、その時のことを待ち望む、それを主の再臨、教会の中だけで使われる言葉で、他ではあまり聞かないですけど、再びいらっしゃる、主の再臨を待ち望む、その思いを新たにすることもできると思います。

それは待降節に限らず、毎回のミサの中で「信仰の神秘」として言葉で表現していますように、わたしたちはいつも主の復活を思い起こし、そして再び来られるのを待ち望むということをミサを通して表わしているわけですが、一方で、主が再び来られるのを待ち望む、この世の終わりの時にイエス様がいらっしゃる、と言われても、なんかピンとこないかもしれません。あるいは、それが自分が天国に行くか行かないのかっていうこと、そのことを気にするみたいなことだけだと理解すると、主の再臨を待ち望むっていうことの意味を取りそこなう可能性があります。

主の再臨を待ち望むというのは、もっと世界的な、あるいは自分を越えた広がりをもつ、わたしたちが持つように促します。世界を見てみれば、いろんな所で今でも戦争があって、そして大切な人を失う、あるいは自分自身の人生を花開かせることができな

い状態にいる方がたがたくさんいる。あるいはわたしたちのこの日本の社会においても、孤独の中にいる、あるいはいろんな人間としての尊厳が守られないで泣いてる人がいる。そういういろんな形で人生を通して神様が本当は備えてくださっている恵みに触れることが、人と人との罪の連鎖によって疎外されてしまっている多くの人々、泣いてる人たちが慰められ、孤独や苦しみの中で人生を歩むことができない、座り込んでいる人たちが立ち上がる力をいただく、すべての人にそのような時が訪れることを、待ち望む。そこに希望を持っている、というのが主の再臨を待ち望むということの本当の意味であると言わなきゃいけないんじゃないかなと思います。そのためにわたしたちはいつもいつもこのごミサをお捧げするということです。

はじめの話にもどりますけど、そのつとめを迫害下の先輩たちは果たしたかったけど果たすことができなかった。わたしたちはそのつとめを果たすように招かれている。わたしたちが良いからではありません。それはたまたまと言うか、神様のご計画の中でわたしたちが迫害時代の人たちの姿を見て、ミサを捧げることがいかに恵みなのかということをお教わっていただいているということなんだと思います。そのようにして、主が再び来られるこの待降節に当たって、それはすべての人が慰められ、力を得る、その時のために待ち望み、その時のために祈り、そして聖心ならばわたしたちがそのために何かの働きをする、その思いを新たにできる機会であると思います。

そのようにして、わたしたちがふさわしく待降節を過ごして、喜びの内に、でも完成してないから喜びは将来に向かっての喜びの先取りでもありますけど、クリスマスをお祝いすることができますように、お互いの内に神様の導きを願いながら待降節を過ごしたいと思います。

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>